

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：23804

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23520168

研究課題名(和文)長野県諏訪地方におけるラッパ文化の形成に関する研究

研究課題名(英文)Study of Bugle Culture in Suwa Area, Nagano Prefecture

研究代表者

奥中 康人 (OKUNAKA, Yasuto)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・准教授

研究者番号：10448722

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近代日本における西洋音楽と楽器の文化変容の事例研究の一つとして、長野県諏訪地域におけるラッパ文化に着目し、主に文献調査およびフィールドワークによって、その歴史と現在を明らかにした。幕末に軍隊の信号の道具として取り入れられたラッパは、明治期に日本各地の消防組の備品として広く普及した。ただし、その後の通信技術の発展によりラッパは形骸化した。長野県においては戦後に「ラッパ隊」が音楽演奏団体として再編され、1980年代以降に「吹奏大会」が開催されたことで演奏技術水準が向上した。特に諏訪地方では消防団ラッパ隊が御柱ラッパ隊の直接の基盤となり、現在では民俗音楽として独特な文化を形成している。

研究成果の概要(英文)：This is a case study of the acculturation of Western musical instruments in modern Japan, focusing the past and present of the bugle (rappa) culture in Suwa area, Nagano Prefecture, mainly by literature research and field work. Bugle, which was adopted as a tool for transmitting the signal in the army at the end of the Edo period, was spread widely and used in volunteer fire company around the country during the Meiji era. However, by the development of communication technology, bugle rapidly became useless. In Nagano Prefecture, "Bugle Corps" was reorganized as a group to play the music, and the Bugle Contest has been held since 1970's. Especially in Suwa area in recent years, fire bugle corps is recognized as a very important musical instrument of traditional religious ceremony.

研究分野：音楽学

キーワード：文化変容 西洋音楽

1. 研究開始当初の背景

明治期以来、現在に至るまで、日本における西洋音楽文化は興隆をみせているが、音楽の歴史研究は、もっぱらその直輸入的な側面たとえば、日本人によるベートーヴェンの演奏や、オペラの上演などの歴史研究に偏ってきた。その結果、西洋音楽文化が独自に変容、土着化したような音楽文化は、研究対象としては扱われにくく、本格的な西洋音楽文化よりもレベルの低いものとして評価されがちであった。しかし、ポピュラー音楽を含む音楽文化の現在を直視するならば、いわゆる「和洋折衷」的な視角からの分析は不可欠であり、しかもそれは現代に限らず、過去についても同様である。

現在にダイレクトに関連する和洋折衷的な文化の初期形態として注目されるのは、幕末明治期に流入した軍楽、とりわけラッパ（ビューグル）の日本における展開と定着プロセスである。

ヨーロッパ起源の金管楽器で、音程を変えるためのピストンやバルブを持たない自然管のラッパは、幕末明治期の日本に最も早く流入した西洋楽器の一つだが、山口常光の研究などいくつかの例外を除いて、先行研究はほとんどなく、従来多くの日本音楽史は、日本にラッパが入ってきたという、単なる事実関係の叙述にとどまる。ましてや、明治以降の展開（変容）については、言及されることすらなかった。

主に旧陸海軍において信号手段として用いられたラッパは、通信システムの発展によって次第に形骸化し、現在の自衛隊においても象徴的な存在にすぎない。だが、本研究が着目した長野県では、おそらく他の都道府県とは異なり、ほぼすべての市町村の消防団において、ラッパ隊が組織されており、その活動も盛んで、毎年、県消防協会主催のコンクール「ラッパ吹奏大会」が実施されているほどである。つまり、ラッパが信号合図の道具としてではなく、「音楽」を奏でる楽器として認識されている。とくに諏訪地方では、諏訪大社の御柱祭にも必ず用いられる楽器としてラッパが定着している。このように人々の生活のなかに浸透しているにもかかわらず、研究対象にならなかったのは、明らかにおかしい。

そもそも、一見すると古くから変化せずに、連綿と伝統を守り続けてきかのように見える「日本音楽」も、実は例えば、雅楽や三味線を例にするまでもなく、外来音楽の流入と変容の連続であることは、どのような日本音楽史の教科書でも言及している。本研究の対象となるラッパも、そうした一連の「外来音楽」の流入と変容プロセスの事例研究として構想されたもので、近年注目されているプラスバンドのグローバル化とローカル化（フリース）とも関心を共有している。

2. 研究の目的

本研究の対象である日本の「ラッパ文化」は、前述のとおり、これまでほとんど研究対象にならなかったため、学術的な調査、信頼に足る先行研究等が存在せず、基礎的な資料をそろえるところから始めなければならない。そこで本研究は、長野県諏訪地方において独自の展開を見せたラッパ文化について、その誕生の経緯から現在までの展開を明らかにすることを目的としている。

また、その前提として、日本における（あるいは長野県下における）ラッパ受容 用いられ方、場、教育、製造、譜面の作成、奏者等 全般を併せて明らかにしつつ、諏訪地方の特徴を浮き彫りにする。

3. 研究の方法

主に文献調査と、フィールドワーク、および関係者からのインタビューによる。

・文献調査

まず日本における従来における「洋楽受容史研究」の記述を整理し、すでに判明していること、まだ判明していないことを導き出し、課題を設定する。

消防組・消防団における「ラッパ」については、消防史、消防組（消防団）史、および各地の地方史文献を対象として調査を進めるが、とくに長野県内の県市町村史、消防組関係文書などを可能な限り閲覧し、その導入プロセスを明らかにする。

また、諏訪地方における諏訪大社御柱祭に関しては、『信濃毎日新聞』データベースを活用し、明治期から平成期までの御柱関連記事を対象として、御柱におけるラッパ演奏の実態を探る。

・フィールドワーク、およびインタビュー

現在のラッパ文化を観察するために、毎年夏に開催されている消防ラッパ吹奏大会（地区大会、および県大会。あるいは日常的な消防団のラッパ練習等）を視察する。

また現在の消防団ラッパ隊に所属するメンバー、あるいは、かつて消防団のラッパ隊に所属していたメンバーからの聞き取り調査も実施する。

4. 研究成果

以下、本研究で明らかになったことについて、簡潔に成果を述べる。

(1) 初期ラッパ製造について

ラッパ文化成立の前提として、第一にラッパが存在しなければならないが、これまでの音楽史研究は、日本のラッパ製造に関して、あまり関心を向けてこなかった。これまでの定説では、幕末から明治初期にかけて輸入されていたラッパは、明治 17 年から陸軍工廠で製造されるようになった、とされていたが、文献調査の結果、少なくとも明治 8 年には東京の造兵廠で「宮本勝之助」という職人がラ

ッパを製造していたことが明らかになった。また、国立公文書館アジア歴史資料センターのDBによれば、同時期にラッパが国産されていたことを思わせる記事が散見され(ただし得られる資料が断片的であるため、確定できることはあまり多くないものの)、従来の明治17年説を覆す傍証となる。

(2) 日本における消防ラッパについて

明治前期において軍隊だけがラッパを占有していたわけではなく、他にも使用例があったことには留意しなければならない(本研究では言及できないが、消防以外にも警察、学校、工場といった近代的組織で使用例がある)。

『日本消防百年史』によると、明治13年3月、東京府に設置された近代的消防組織、「消防隊」が「進退の合図にラッパを用いた」記録がある。しかし、これは例外的に早い事例であり、全国の消防組織におけるラッパ受容の実態を考えるうえでは除外したほうがよい。全国的な消防近代化は、明治27年に公設消防組が創設される契機となった勅令「消防組規則」によって始まるからである。近代的な消火活動に適した集団行動を円滑に実施するためには、事前の訓練(演習)が必須となり、軍隊で用いられていた信号合図のための楽器、ラッパが導入された。また日頃の訓練(演習)の成果は儀式(巡検や出初式など)で披露されたが、その際にもラッパは用いられた。

長野県内の郡・市・町・村の「史誌」あるいは「消防団史」の類を対象に調査をすると(例外的に早い例として明治20年代前半の「日名沢新調消防器具」のラッパがあるが)、明治27年の宮田村、根羽村をはじめとして、明治30年代に入ってから創設された消防組に設置された用具・備品のリストのなかにも、「喇叭」の文字が記載されている。もちろん、それは努力目標にすぎなかった可能性、また存在していたとしても、実際には使われていなかった可能性もあり、記載事項をそのまま鵜呑みにすることはできない。だが、入手することができた群馬県の同時期の消防のラッパ譜(筆写譜)には明らかに使用の痕跡があり、また明治後期に刊行されていた『大日本消防協会雑誌』の記事等を見る限りでも、少なくとも明治末期から大正にかけて、演習や巡検の際にラッパを信号合図とする習慣が広く定着していたことは確実である。

ラッパが軍隊を通じて普及したことは否定できないが、明治～昭和前期の各地域社会における消防組(軍隊とは異なり、どんな僻地でも、消防組は存在していた)と、そこに所属した多くの若者との関係性(1940年代の一時期を除けば、多くの若者は軍隊ではなく消防団に所属していた)を考えた時に、消防組が西洋楽器(ラッパ)の普及に対して大きな役割を果たしていたことも明らかである。

(3) 戦後の長野県における消防ラッパ

戦前の消防組が警防団に改組され、戦後になって消防団が組織される。戦後の消防団にも、「ラッパ手」という肩書をもつ複数の団員は確認できるが、複数のラッパ手によって構成される「ラッパ班」が一般的になるのは昭和30年前後のことである。

飯田市では早くも昭和23年に「ラッパ訓練」が開始され、昭和26年に芳川村消防団(現在は松本市)では「ラッパ講習会」が開かれた。昭和27年に国家消防本部による「消防ラッパ譜」が制定されている。また、少なくとも昭和30年の豊科町消防団(現在は安曇野市)には「ラッパ班」が存在した。

現在、音楽隊とラッパ隊の活動が盛んな上田市消防団の場合、その沿革に初めて登場する記録は、昭和30年にラッパ班の「講習」がおこなわれ、それと前後して県消防学校のラッパ手が「ラッパ科」に入校した記録がある。

警防団時代にすでに「喇叭隊」が存在し、ラッパ隊の総合演習も実施していた松本市では、昭和29年にラッパ手を分団に配置。

諏訪地方では、富士見町の消防団では昭和30年に「ラッパ班長」が、諏訪市では昭和29年に本部役員としてのラッパ手が、昭和32年までに「ラッパ長」という役職が存在していたこと確認できる。

また、昭和31年に発足した松川町消防団(下伊那郡)には、当初より制度として「喇叭員(喇叭手)26名」があった(翌年、県消防学校のラッパ科に入校している)。

同じ南信の飯田市消防団では昭和32年に改組された新組織のなかに「喇叭長」「喇叭班」の文字が見える。

このように昭和30年代には各地で「ラッパ班」が組織されていたが、昭和42年に長野市は160人からなる「ラッパ隊」を結成した。翌年に松本市もそれまでの組織を再編して「ラッパ隊」を組織し、松本市民祭に参加する。上田市は昭和42年に消防学校のラッパ科の講師田中春洋を招いて講習を受け、翌年には出初式のパレードにラッパが参加する。おそらく一般市民に向けて演奏する機会が増えたのは、この頃だと思われる。

当時の県消防学校のラッパ科についての詳細は不明だが、ラッパ指導に関して中心的な役割を果たした存在であったこと(逆にいうと当時の各消防団には教習指導ができる人物がいなかったこと)を示唆している。昭和46年にラッパ科に入校した飯田市消防団のラッパ手は、そこではじめて打楽器を用いることや、種々のラッパ隊アンサンブル用の楽曲の存在を知ったという。

昭和49年10月20日、諏訪消防協会主催の第1回ラッパ吹奏大会が開催される。管見の限りでは、これが長野県内で開催された最初の吹奏大会(コンクール)である。その後、北佐久消防協会では、昭和52年に第1回北佐久消防協会ラッパ吹奏大会が、昭和53年

に上田市でラッパ吹奏大会が開催されている(上小消防ラッパ協会の吹奏大会も開催されている)。つまり、主に市町村レベルの(分団対抗の)大会と、複数の市町村を含む地区レベル(郡レベル)の大会が昭和 50 年代に開催されるようになった。昭和 56 年に開催された第 3 回中野市消防協会主催ラッパ吹奏大会では、参加した 9 チームが「課題曲 4 曲」「自由曲 1 曲」を演奏しているが、この際、審査員の市川五郎が「将来は全県的なものに」という抱負を語っており、県大会の構想の萌芽がここに見られる。

昭和 57 年の南信ブロック消防会議で複数のラッパ教本を統一すべきであると声があがり(つまり、県内で統一基準がなかった)。同年、長野県消防協会理事会の席で、統一教本の早期作成の要望が報告されている。

その要望を受けて、昭和 58 年 3 月、(現在も使われているラッパ教本である)市川五郎編纂『ラッパ教本』が刊行され、5 月 31 日に松本市において第 1 回長野県消防協会主催の消防ラッパ吹奏大会が開かれた(優勝:中野市)。この県消防協会主催の消防ラッパ吹奏大会 2015 年に第 24 回目を迎え、各地のラッパ隊の技術水準の向上に大きな役割を果たしている。

(4)『信濃毎日新聞』のラッパ

『信濃毎日新聞』DB を活用し、明治～平成期の御柱関連記事を精査することによって御柱におけるラッパの存在を確認した。ラッパ使用の初出は 1932 年であり、1926 年には少なくとも活字にはない。1932 年以降、毎回の御柱記事にはラッパの文字が散見されるが、1980 年頃から頻出するようになるのは、消防団のラッパ隊形成と関連すると考えられる。年を下るにつれ情報量が多くなるため、安易な比較はできないが、平成になると見出し語にラッパの文字が使われるだけでなく、写真、ラッパに関する記事も登場する。

(5)フィールドワーク調査

長野県消防協会主催ラッパ吹奏大会(伊那市 2011・上田市 2012・長野市 2013・大町市 2014・諏訪市 2015)、岡谷市消防団ラッパ吹奏大会(2013)、茅野市消防団ラッパ吹奏大会(2014)、諏訪消防協会ラッパ吹奏大会(2012、2013、2014)、諏訪地区消防団ラッパ合同練習(2011)

(6)インタビュー調査

消防ラッパ隊関係者

現在の諏訪地方(岡谷、下諏訪、諏訪、茅野、富士見、原)の消防団ラッパ隊の関係者に現在のラッパ隊についてインタビューをおこなった。ただし、消防団員は数年～十数年でメンバーが入れ替わるため、自分より前の世代については把握しておらず、したがって、インタビュー内容は現在のラッパに限定された。一点だけ特筆しておく、各団体と

も、吹奏楽やオーケストラ等においてトランペットの吹奏経験のある人物、あるいは作曲や編曲など高い音楽知識をもつ人物が消防団員に存在する。本来、消防団はボランティア活動であるものの、実質的には成人の「暗黙の義務」とみなされているエリアもあり、これまでになく音楽レベルが高くなっている(1980 年代以降、学校吹奏楽の普及により、管楽器経験者が増えたこと、消防団や消防署に音楽隊が設置されたことも要因である)。近年は、音楽経験のある消防団員がその能力を生かしてラッパ隊に入るというよりも、その活動が注目を集める、ラッパ隊にあこがれて消防団員になる例も珍しくないという。他に、それぞれのラッパ隊の人数や練習、レパートリー、活動内容、楽譜等について情報を得た。

消防団所属 A 氏

消防団所属の A 氏は、近年のラッパ隊のレパートリー拡大と活動の活性化に重要な役割を果たしたことが、からあきらかになったため、A 氏の個人的な音楽履歴(学生時代、職業的な作曲活動、消防団の活動とラッパなど)を中心に聞き取りをおこなった。岡谷に生まれ育ち、中学高校時代にはプラスバンドを経て、東京で職業音楽家をめざす高度な専門教育を受けた A 氏が、実家に戻った際に待ち受けたのは、そのエリアの「暗黙の義務」である消防団であった。音楽の専門家として、入団当初の消防団のラッパのレベルは正直なところ低かったという(文献調査で明らかのように、昭和 30 年代以降、長野県内には多くの消防団にラッパ班、ラッパ隊が組織されたが、音楽の専門家の目に映るレベルはおおむね低かった)。しかし、積極的な助言および指導によって消防団のラッパのあり方を変化させた A 氏は既存のレパートリーに加え、多くの人々に知られている楽曲をラッパ隊用にアレンジし、こうした岡谷市内での試みは、その後、諏訪地域の合同ラッパ隊との合同演奏をとおして広がった。

消防団ラッパ隊 OB の B 氏

消防署の協力を得て、かつてラッパ隊隊長を務めた B 氏(昭和 6 年生まれ)から当時のラッパについて聞き取りをした。ラッパを始めたのは小学生のころで(戦前か戦時中の御柱祭)昭和 23 年に消防団員ラッパ手となる。当初は消防用の信号を吹いていたが、昭和 36 年にラッパ隊として再編。昭和 49 年に諏訪でラッパ吹奏大会が始まり、昭和 54 年に初代のラッパ長となった。ただし、当時のことに関してほとんど記憶はないという。とはいえ、戦前の御柱のラッパ、昭和 20～30 年代についての貴重な証言を得ることができた。

御柱関係者 C

諏訪大社御柱に参加する上社の氏子組織 C の複数メンバーに簡単な聞き取り調査を行

った。近年の御柱におけるラッパ隊に関して、情報を得た。上社・茅野市においては消防団ラッパ隊関係者が消防団の任務とは別にラッパ手として御柱に参加しているため、その楽器編成、レパートリー等は消防団に準じている。ただし、近年は新たな試みも見られ(観客に対してよりアトラクティブな側面が強調されるようになった)、その結果、この団体Cは、野球やサッカーの応援、地域振興イベント等に招聘されることも多くなり、この地域の新しい芸能として認識されつつある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計2件)

(1) 奥中 康人「浜松における文化資源としてのラッパ文化」、日本音楽学会、2015年9月25日、宮城学院女子大学(宮城県・仙台市)

(2) 奥中 康人「近代浜松における音空間 日本楽器株式会社とラッパ文化」大正イマジュリイ学会、2015年7月18日、静岡文化芸術大学(静岡県・浜松市)

〔図書〕(計1件)

(1) 奥中 康人、春秋社、『和洋折衷音楽史』、2014年、236ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥中 康人 (OKUNAKA Yasuto)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・准教授
研究者番号：10448722